



幼児の徳育についての課題

及川ふみ

子どもとは「おとなが教えられるものである」などという定義が、今日のおとな同志の話のなかにも、うなずかれています。のを聞くときに、古くからいふるされているこの意味のこゝとばのいろいろが思いうかばれるのであるが、今日の社会にも子どもと一しょに生活することの多いものには、このことはしばしば経験しているのである。

「うちのお父さんが、こうしているから、いいんだよ、僕もこうするんだよ」といいながら、のぞましくない態度を平気でしている男児や、「うちのお母さんがこれでよいといったから、わたしもいったのよ」などと自信ありげによくないことをよいこととしていいはっている女児もある。また幼稚園ごっこなどの遊びがはじまって次第に発展していくときに、そ

の受持の教師の姿がほうふつとしてくる。表情や、ことばづかいがあらわれてくる場などが観察の窓にうつってくるなど、それがのぞましい姿であれ、のぞましくない姿であれ、おとなが教えられるところが多いのである。

幼児の社会性の進歩の段階、などという心理学的の根拠からの説明でも、この子どもが「おとなをまねる」ということはその進歩の段階としては当然のことであって、幼児期のおおくの時期には、子どもはおとなに依存し、おとなに庇護され、み守られて生活しているのであるから、子どもをとりまく周囲のおとなに対しては、満腔の信頼と尊敬をもって何でもおとなのしていること、いっていることをまねようとしているのである。子どもの親愛する周囲のおとな、家庭にあつ

ては両親をはじめとして、年上の家族の人々、幼稚園にあつては教師の行動や、ことばに對して全ぶくの信頼と安心ともつて、盲信している時期であるといえるのであろう。

今、幼児の徳育について考えるにあたって、まずはじめにこの点に基盤をおくべきではなからうかとおもわれる。理論的に説明をしてつぎに実践にはいるというのにはまだまだその時期ではないのであつてそのことの理解という段階には到達してないのである。

子どもを取巻く周囲の環境、おとなの言動というものが、子どもの徳育について第一の場であるということから、よき環境につつむということが重要な点であろうと思われる。

理くつぬきのよき環境によつて子どもはおとなに教えられていくものである。

次におとなは子どもに對して、よき子どもとしての方向づけをしなければならぬことではなからうか。

自立し独立すること

おとなに依存していた時期から次第に成長して、自分のことは自分でする。他人にめいわくをかけない生活態度ができてくる。基本的習慣の自立は、日常生活の全般にわたつてのきわめて広い範囲のことであつて、この習慣の自立は理くつなしで反復して習慣づけることである。

友だち遊びが円滑にできる態度

子どもの仲間の一員として円満な生活態度がとられることこの二つの生活態度、はじめは自分のことは自分でする、他人にめいわくをかけない、ことからはじまつて、次第に友だちの仲間に入つて協調することができるといふ子どもであるように方向づけをする。

また友だち遊びのあり方についても、始めはきわめて少数の友だち遊びからはじまつて、次第にその数を増して仲よく遊ぶことができるように指導しなければならぬ。はじめは二人の少グループからはじまつて五人、六人とそのグループの人数を増加してきても、協調できる態度からさらに進んで友だちに迷わくにならないようにという消極的な立場から、進んで友だち同志の仲間にあつて役に立つところの役割をはたすことができるように進められなくてはならない。

この二つの要点を子どもの生活態度の指導の目標として、周囲のおとなは常に考えていなければならぬのである。

個々のひとりひとりの子どもとしてよい子ども

子どもの世界におけるよい子ども

この「よい子ども」としての指導にあたっては、常に生活の現場にあつて、具体的な指導が重要なことであり、それをくりかえしくりかえし反復することによつて習慣づけをし

なければならぬ。

「こうしよう」といいながら、おともも一しよにできる場合などことさらによいのであるが、それまでいかな場合にも、その現場の処置についてはっきりとした線を具体的に示さなくてはならない。こうすることによって、子どもは自分のしていることについて、またいつていることについて、自信と納得がもてるようになってくるのである。子どもが自信をもってすることに對しては常に気持ちがあん定していて、他人がみていようが、みていまいは問題でなく、いつも正しく強くすすめる態度ができてくることであろう。子どもがよいことをした場合は、これをすぐにとりあげて推奨したい。子どもが日常いつたり、おこなつたりしている現場をみると、よき環境につつまれていても、また正しいよき方向づけをしてもらつていても、しばしばのぞましくないこともあるのはよくあることである。そこで「よいことをしている」とか「よいことをいつている」とかにおとなが気づいた場合には、卒直にこれを推奨して、おとなもこれをよろこび、これに満足している態度を示すことがよい。これによって子どもは力づけられることが多いであろう。

また、逆に、子どもが、よくないことをしたり、よくないことをいつたりした場合には、これをすぐに、気軽にとめる

ことが大切なことである。子どもはよくないことも強い根拠があつてしているのでない場合が多いし、よくないことをいつていても、それが何であるかもよくわからないで、しゃべつてるときもしばしばあるので、諄々とききかせる態度はさけて、これを軽くうけ、とめることがよいようである。

子どもはひとりひとりちがつた素質をもち、ちがつた環境に育つていたのであるから、その個人差も多いということについて理解していなければならぬ。ある子どもについて実践してよい結果が見られたことも、別の子どもにあつてはそれが失敗におわる場合もある。ここに子どもの指導にむつかしさとこまやかさとが大きくあるわけでもあろう。

そこで実践にあつては、どこまでもその子どもに強い愛情をそそぐということ、子どもはよくこのおとなの愛情をうけとつてくれるのである。

子どもも理解するようになってくる。

幼児期も終り近くなり、小学校入学期もせまるころになると、子どもの理解力も次第に進んでくる。そこでいつまでも理くつぬきの盲信ということから、言動にたいして理解をもち、納得してするというところへ進ませなくてはならない。よい子どもとしてすべきことと、してはいけないことについて、その理由を理解できるように導かなくてはならない。

よき子どもとしての徳育についての具体的点、指導の場は、その地域社会との関係、個々の子どもということから現場のものもっとも適切なるものを取りあげ、親愛なる態度で、根気よく実践するのであるということのほかはない。

去る十月二十三、四、五の三日間にわたっての、全国校長研究協議会が文部省主催であった際の、主なる研究主題は

A 小学校・中学校・高等学校・特殊教育の分科会

一 道德教育の基本的な考え方について

二 道德教育の指導組織および地域社会との連絡協力について

三 道德教育の実施の方法について

四 道德教育の当面する諸問題について

B 幼稚園分科会

一 幼児の成長発達にそくし、どのような道德性を、どのようにして伸ばしたらよいか

二 幼児の基本的な生活習慣の形成、安全指導、身近な集団生活への適応のために、とくにどんな点に留意したらよいか

三 幼児の道德教育における家庭との連絡協力をどのようにしたらよいか

四 道德教育に対する教師の関心と意欲をどのようにし

て高めたらよいか

幼稚園グループでは全国から六十有余の国公私立幼稚園長がこれに参加して、一、二、三、四の問題について四名の研究発表があり、質疑応答などあった。またこれに参加された全国各都道府県の幼稚園長が事前研究なされた研究資料をもちよって、それぞれ発表されたのであったが、このたびのこの研究討議は、主として幼稚園において、いかなる徳目が適切且つ重要であるかをまとめるとか、こういう線にそって指導した方がよいとか、こんな方法によって実践するとか、などの線を見出すことについての協議をするよりも、むしろ全国各地における研究資料について、各自がその意見の交換をするというところに重点がおかれたのである。

多くの園長たちの発表資料の傾向をみると、幼児の德育指導は、環境をととのえ、くりかえしくりかえし習慣づけるところがその第一義であるように多くうけとられたのであって、それについて、家庭との連絡、教師の関心と意欲などがことさら多く討議されて一同今後の課題をもって散会した。

道德教育が教育全般の時期においてそれぞれの立場において研究されるときにあたって、その最初の段階における幼児期の德育については、ここに大なる課題としてのごさされているのである。